

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年9月 No.95

胎児を守る運動

検査社会の到来

一、検査社会の到来

優生保護法は96年、母体保護法に衣替えし、胎児に異常がある場合の中絶を禁止した。しかし、歯止めにはなっていないようだ。経済的理由などを適用することで法的目はくぐれる。何ともやり切れない思いである。ところが先月この不安に輪をかける報道があった。厚生省の調査によると、胎児がダウン症などの病気にかかっているかどうかを母親の血液から調べる出生前診断が、国内の医療機関で広く行われているということである。しかも、よく分からないが、検査精度が低いためか、判定が確率で伝えられるという。出産前に生まれる子どもさんのダウン症になる確率は何パーセントです」と言われて、動転しない親はいない。中絶はさらに増えるのではないか。

二、神様への信頼

こういふ社会の動きに対し、わたしたちの力は余りにも小さく弱い。しかし、無力感に圧倒されるのも、恵みかも知れない。信仰を振り

返るチャンスになるからである。アジアのどこかの国の話である。人権が何かの集まりで議論が白熱してきて、「結局、悪いのは金持ちだ。彼らが変わらなければ、どうにもならん」という空気が圧倒的になったとき、一人の司教が発言した。「わたしたちが金持ちの改心を信じてやっているのだから、わたしたちの活動はカトリックの活動といえるだろうか」と。

自分の無力を知らされて苛立つかわりに、神様のお力に信頼して、努力を続けなさいということだろう。わたしたちの手の届かない所にも神様の手は届くのだし、キリストに結ばれている限りどんな働きも決して無駄にはならないのだから。

三、父と子の関係

新約の土台は神様がわたしたちをご自分の子どもにしてくださいましたことにある。父と子の関係が始まったのだ。イエス様が「常に御心になんうことを行われた」のも、「十字架の死に至るまで従われた」のも、「父に喜んでいただくこと。父

を悲しませてはならない」という子どもの心からだった。父が、イエスの心をどれほど喜ばれたかは、復活といつてどんでん返しの勝利をお与えくださったほどである。掬はもう「守ればよい。守らせればよい」ものではない。愛の掬も、「父に喜んでいただくこと」という子どもの心が、自分から跳び付くように、明示された父のお望みなのである。

「新しいブドウ酒は新しい革袋に入れなければならぬ」。新約においては、「成功させよう、よい結果を出そう」という努力だけでは足りない。時には、「父に喜んでいただくこと」という子どもの心があつたかどうかを振り返って見る必要があるだろう。

四、「あかし」

わたしは、「授かった子どもはどんなに苦労しても育てます。神様に喜んでいただくために」というカトリック家庭が増えることを切望している。こういふ家庭を神様は必ず喜んでくださる。そして、もしかすると神様「自身が周りの

人々の目を開けて、「本物の家庭の幸せ、素晴らしき」を見せてくださるかもしれない。これが本物の「あかし」ではないか。「あかし」は福音宣教の最も効果的な手段である。「神様に喜んでいただくこと」という心は、新約に生きるわたしたちにとつて小さなことではない。今年には聖霊の年である。聖霊は、神の子としていただいたわたしたちにイエス様の言葉を理解させ、イエス様の心を持たせようと今も働いておられる。検査社会の到来に備え、わたしたちにもイエス様の心を持たせていただくようお願いしたい。

私達の特別な要求

一九九二年五月二十九日、セスが生まれた一時間後、小児科医は私の部屋にきて私達に話があると仰いました。私達の赤ちゃんには問題があるとのことでした。ダウン症候群などというものが、私達は馴染みがあったのでしょうか。私達は呆然とし、打ちのめされ、そして恐ろしくなりました。

夫のルイスと私はお互いになりついで、全てのが崩れ落ちたかのように泣きました。私の妊娠期間中、子どもを持つうとして他の親達と同様に、私達の赤ちゃんが健康であることを祈り続けました。しかし今は、「どうしてこんな事が。」と疑問を持たざるを得ません。これは決して私達の子に望んだことではありません。「神様、なぜ。」私達は叫びました。

最初の数週間は私達は不安で一杯でした。なぜなら私達は初めて親になることがどういう事かを学び、そしてどうしたらセスに彼が必要な特別な配慮をしてあげられるかを、悩んでいたからです。しかし、セスの病気が知れたとたん、カード、電話、贈

り物、お祈りの言葉、そして訪問がわが家に殺到しました。私達と一緒に彼らは私達のいとおしい赤ちゃんの誕生を祝い、彼が人生の中で受ける制約について心を痛めてくれました。そして私達は神の愛と恵みに支えられていることを知りました。

ダウン症候群を持つ子ども達よりも似ている面を多く持つていることを私達は学びました。セスは四歳で同い年の子がまだ出来ないことをいくつか出来ません。彼は他の子ども達と同様に激しい遊びをすることは好きですが、誰かが傷ついた時に愛情や同情を与えるのが早いのです。また、見たままのお祈りをします。例えば食前の祈りの時、彼はただ「食べ物」に対して神に感謝するのでなく、もっと具体的

に、「鶏肉と青いお豆」などお皿の上に乗っている食べ物について神に感謝します。また、日中急に歌い出すこともよくあります。日曜日の朝には私が通う教会のメンバー一人一人に名前を呼んで挨拶をし、彼らで大感激させています。初日から彼らはセス

を抱きしめました。彼は彼のことを知る全ての人の心をとらえることが出来るのです。

もちろん大変な時もあります。あのたった一つの余分な染色体がたたくさんのことに影響を与えているのです。私達は想像していた以上に数多くの小児科の専門医に会いました。そしてセスが今後彼の同い年の子ども達が出来ること遅れをとるようになることに対し悲しみを感じる日々

辞書によると、「優生学」は生殖をコントロールして人類を進歩させる方法を研究する学問であると書かれています。それは肉体的なものであれ精神的なものであれ、将来の世代の種類の質を向上させたり、悪化させたりする社会から受ける影響力を

もありません。しかし、この子のすばらしさと美しさは、そういった失望感や一時的な悲しさよりもはるかに重要なのです。私達は、私達と同じような気持ちを保持している、特別な世話が必要な子どもを持つたくさんの親と会いました。私達の子どもは私達にとって貴重なものですが、神にとってはさらに貴重なものなのです。彼らは大國の指導者よりも多く世に貢献することがあります。彼らは自分達と接触する人々の心をとらえる特別な恵みを与えられているのです。そして、神は人々の心がその特別な恵みを必要としていることを知っているのです。

ルイスと私は、自分達の子どもがダウン症候群だと知っている夫婦と話をすることをいつも熱望しています。そういう健康状態であるというだけで子どもが中絶されてしまうことを考えると心が痛みます。最近私達は、セスと会って私達と話をした結果、中絶をとり辞めた夫婦に会う機会がありました。父親は単に、「この喜びを逃す手はない。」と言いました。私達の願いは、だれもこの喜び、神の子が家族にもたらしてくれる喜びを逃してしまわないことです。なぜならセスは、神の子であると同時に全ての人の子どもでもあるからです。

ヘスミラー

人間モルモット

「それは決して目新しいものではない」

研究するものなのです。弱くて保護を要する人々が、自分たちのためだけでなく、他人の役に立つようにとの目的で計画された研究プロジェクトの被験者にされる恐れのある法案がメリーランド州で提出されました。彼らは「決定能力がない」ので弱く、保護を必要としているのです。つまりそのことは、いろんな理由で、彼らは医学研究プロジェクトの被験者となる前にインフォームド・コンセント(説明を聞いたうえで同意をすること)を受けることができないという意味なのです。

この法案が法律となれば、自分自身の治療にはならないけれども、同じような病気や症状の患者のためになる研究に参加するかどうかの決定を代理の人間がすることになるのです。彼らは人間でありながら、体は科学的な知識を増やすための実験台となってしまうでしょう。

予想可能な問題点

(1) この研究は被験者に直接利益をもたらさないものです。それなのに、その被験者が気づいていなくてもモルモットになる可能性があるので。

(2) 万一「決定能力のない」被験者に障害を与える結果になるようなことがその研究中に起こったとしても、生命倫理学者や研究者や同意を取りつける医師などを含めて、この研究に関わる人たちは民事および刑事上の罪を免れるでしょう。

(3) 万一問われていることが完全に理解できるのでなければ、将来被験者になる可能性のある人は、研究に参加する意志があるかどうかの決定を予防保健医療サービスしてくれる人やその他の代理人に任せてしまいうかたも分けてしまいうかたもありません。もし患者が、たまたま「決定能力がない状態」にされ、目に見える「生活の質」

を回復しそつになければ、患者は恰好の実験材料になる可能性があるがあるので、この研究を「救急処置室研究」と呼ぶ人もいます。

言い換えれば、この提案された法案が州議会でも可決され、知事に署名され、裁判所に認められれば、人間以下の人間というカテゴリが存在するようにになり、その人間の価値が他のカテゴリの人間に利するために計画された医学研究プロジェクトに役に立つか立たないかで決められることになるでしょう。

もし医学研究者や生命倫理学者や遺伝子工学者たちが、人間を被験者とした治療目的の研究は、実際標準的な医療にすぎないものだと社会を納得させることができるならば、このような研究者は、弱く保護の必要な人間ばかりでなく、正常な人間も現在このような実験に利用されることから守っている、正常な国内国外の研究ガイドラインや規制を無視することができるとでしょう。厄介な規制がなければ、責任も全くないのです！

ニューズ報道によつて他の州でのこのような残虐行為が明確になる

一九九六年十二月十六日付けのワシントンタイムズは、食品

医薬品局による調査で、新薬を試された人たちの53%が、彼らに参加したテストの試験的な性質に関して、事前に完全には知らされていなかったことが判明したと報じました。

またカリフォルニアでは、能力的に劣った患者と彼らの代理人が、精神医学研究者と(CO)を告訴しています。この患者たちは、そのことについて患者自身や代理の者が完全には知らされていなかったこと、そしてその過程でひどい障害を受けたりさらに死ぬことさえあったかもしれない実験に自分たちが使われていることに気がついたのです。研究者や大学側は、患者たちは実際「普通の医療」を受けていただけで、それゆえにインフォームド・コンセントは必要すらなかったと主張しました。

もしあなたが自動車事故にあつたら、救急処置室にいるあなたが「救急処置室研究」に利用されていることに気づくことになる可能性もあるでしょう。もしあなたの代理人が見つからなければ、医者はあるが肉体的・精神的に能力を失つたと宣言し、病院の検討委員会がオーケーを出すだけでよいのです。

これが優生学です

私たちは、人間固有の価値や尊厳や神の全人類に対する思召

しにおける役割をだいたい尊重しなくなってきたている事態に今直面しています。私たちは化学的な方法で殺される子どもたちを国家が見て見ぬふりをするのを目のあたりにし、中絶という行為によって何百万人も胎児が殺されるのを見、そしてその中絶された胎児の身体からもぎ取られた細胞や組織や体の一部が、ぞつとするような研究の実験に使われるのを見ました。

私たちは、一方で、受け入れられない「胎児を殺しながら、「優良な」胎児を識別するために使われる体外受精のような、いわゆる不妊治療を見ました。また経済的・社会的圧力にさらされて、生きることよりも死を選ぶことを余儀なくされた瀕死の人たちを見てきました。そして今また新たな人間の良心の崩壊を見ているのです。

この提案されたメリーランド州の法令で提唱された行為は、優生学的な行為なのです。それらは、文字通り適さないあるいは尊重するに値しない、望まれていないあるいは重荷である、又は五体満足でないと思われている人たちの命を支配したいという人間の欲望の現れなのです。

しかし、科学のゴミの山に人間を捨てるこれらの優生学的な理由を考へる時、私たちのこの近年の残虐行為がどこから来たも

のか思い出すとよいでしょう。科学と科学研究は私たちに中絶と産児制限をもたらし、世界はそれに同意しました。

科学と科学研究は、子どものできない夫婦に不妊の問題は解決し、「五体満足な」赤ん坊が産めると知らせ、世界は同意しました。

科学と科学者達は私たちに、不治の病や身体障害は耐え難いものなので、出生前にそれらを捜し出し処分したほうがよいと、あるいは生まれてから本当に不都合を生じた時にそれらを捜し出して始末することができると説明しました。そして世界はこれにも同意しました。

そして今、科学と研究者達は、私たちの同意を得ずに私たちが実験台にしたがっているのです。世界はこれにも賛成するのでしょうか。

世界は優生学的なものを見方をする文化、つまり、その時その時の主観的な価値の物差しに従つて人間を見るようになった国家になりつつあります。時が経つにつれて、この価値の物差しから生き残れる人は、ほとんどいなくなるでしょう。

中絶反対の人イコール研究反対の人ではありません。私たちは道義に反した研究には反対です。行動するのは今なのです。

「体外受精・家族の脅威」

一九六八年のローマ法王回勅「フーマネ・ヴィテ(Humanae Vitae)」の教えの一つは体外受精(IVF: In Vitro Fertilization)についてでした。その回勅では、全ての人工的な産児制限法を強く非難してました。なぜならば、人工的な産児制限は自発的行動である夫婦間の性交が持っている二つの長所を分断するからです。その二つとは、新しい生命を授かるということと、夫と妻が文字通り一つの肉体となり、相互の愛を究極に共有することなのです。避妊を用いることによって、性交による生殖の良い面を夫婦が否定するようになるのです。

標準のIVF実施要綱によると、夫婦が強く望めば、子どもという贈り物を人間の愛を否定する技術によって得ることが可能です。IVFについてよく見ていくと、IVFを強く非難しているカトリック教会の賢明さを知ることになります。カトリック教会は、家族に対するIVFの暴行と同時にその他のIVFの暴行の証拠を示してくれているのです。

あるかということ、それはIVFが生命に対する敬意というものを持っていないからです。このことについて、ジョージ・F・ウィル氏が明瞭に主張しています：「生物学は人類を狂気の国へと引きずり込もうとしている。それは、全ての人間の生命は貴重なものであり、尊敬の念を持って扱わなくてはならないという信念を脅かす国である…。胚移植は、産まれてくる赤ちゃんに対する未知の危険性が多いため、人工授精とは異なる。それ故、最低限「危害を加えない」という医学倫理への適合性を厳密に検討しなくてはならない。生命に対するある種の操作は我々の神秘に対する感覚を腐敗させ、さらに生命への敬意を腐敗させる」。一九八一年にこのようなことを書いていたウィル氏は、なんて先見の明のある方だったのでしょうか。

最近の体外受精施設のほとんどでは、施設の妊娠成功率を上げるために卵子提供者の卵巣を過度に刺激し、より多くの胎児を生成させようとしています。そして「余分」な胎児は凍らされ、後の妊娠のため、あるいは研究に使われるまで保存されます。一九九五年十一月六日付のワシントンポスト紙が、IVFに関する最新のスクランダルを報じています。それは、高く評価されているカルフォルニア大学アーヴィン校にある体外受精病院で起こったことについての報道で、インタビューやカルテの情報に基づいたオレンジ・カントリー(カルフォルニア州)レジスターの報告を引用したものです。それによると、60以上の胎児が、自分の胎児を受け取っているもの

であると信じ込んでいる複数のレシピエント(胎児を受け取る患者)に移植されました。もちろんその配偶子提供者は何も知りません。このハイテクな不義はあまりにショッキングで、医学界はその病院を閉鎖させました。また、被害者の嘆きがこのような私的資金に基づく実験の規制を求めました。他人の胎児を移植された何人かのレシピエントは後に赤ちゃんを産みました。その子どもの生物学上の親は分からず、これから18年後以降のいつか将来、完全に罪なき近親相姦の妊娠の可能性が出てきたのです。このことは、遺伝学上の破滅的な結末を招く可能性があります。NIH人間胎児研究団(NIH Human Embryo Research Panel)の「専門家」の一人であるロナルド・グリーン氏が起こりうる全ての遺伝的過ちに対する解決方法を提案しました。一九八三年のエッセーの中で、彼は「生命の始まりと生命の終わりに対する私達の考え方にコペルニクス的大変革」を起こすことを提案しています。これに対し、ジェイ・

ディッキー氏が一九九五年九月二十九日付のワシントンポスト紙の中で、「彼の言う大変革は、人間には生まれもつての価値が無く、「個性」や法的な保護は単純に過半数票によって認められる特権であることを提案しようというものである。」と述べています。

オースティンにあるテキサス大学の法律学教授ジョン・A・ロバートソン氏は、現在深い冬眠に状態にある胎児は四万以上で、これら「余分」な胎児を養子に出すことがその解決方法であると提唱しています。彼の拳げているいくつかの計画を見てみましょう。そして、それが我々の知っている核家族に及ぼす影響について考えてみましょう。

『繁殖と不妊(Fertility and Sterility)』誌(1995;64:885-894)の中で、氏は性的機能不全のある夫婦や、既に卵子が機能しなくなった高齢で独身の女性や、人工授精のできなくなったレズビアン夫婦などが、これら小さな人間達を養子にすることができると述べています。もっとも、ロバートソン氏自身倫理的な問題があることは認めています。現在、これらのまれなケースで、ある提供者の胎児を夫婦が受け取る場合、その夫婦は約三千ドルを支払っています。この三千ドルは、レシピエントの状態を看



ディッキー氏が一九九五年九月二十九日付のワシントンポスト紙の中で、「彼の言う大変革は、人間には生まれもつての価値が無く、「個性」や法的な保護は単純に過半数票によって認められる特権であることを提案しようというものである。」と述べています。

オースティンにあるテキサス大学の法律学教授ジョン・A・ロバートソン氏は、現在深い冬眠に状態にある胎児は四万以上で、これら「余分」な胎児を養子に出すことがその解決方法であると提唱しています。彼の拳げているいくつかの計画を見てみましょう。そして、それが我々の知っている核家族に及ぼす影響について考えてみましょう。

『繁殖と不妊(Fertility and Sterility)』誌(1995;64:885-894)の中で、氏は性的機能不全のある夫婦や、既に卵子が機能しなくなった高齢で独身の女性や、人工授精のできなくなったレズビアン夫婦などが、これら小さな人間達を養子にすることができると述べています。もっとも、ロバートソン氏自身倫理的な問題があることは認めています。現在、これらのまれなケースで、ある提供者の胎児を夫婦が受け取る場合、その夫婦は約三千ドルを支払っています。この三千ドルは、レシピエントの状態を看

視するのと、胎児の解凍と胎児の移植の費用にあてられます。胎児提供者は、一人の胎児を生成するZVFの一周期毎に七千ドルから九千ドルを受け取ります。また氏は、レシピアントにその額を負けさせることによって、人間の生命を買うことのできる市場の可能性が出てくると言っています。本当ですか、教授？

アトランタにある生殖生物学学会(Reproductive Biology Associate)の科学ディレクターであるマイケル・タッカー博士は、この質問に対する解決方法を模索しています。博士はメディアカル・トリビューン紙に対し「これは、ZVFの分野である、胎児提供に関して私が本当に提案したい良識ある論議なのです。私達の病院には、現在かなりの数の冷凍された胎児が眠っています。このような胎児に囲まれているのは結構気が滅入るものです。私達の施設は、胎児保管倉庫になろうとしています」。博士は彼の病院で保管されている三千五百人の胎児のことを言っているのです。また、博士は次のように付け加えています。「この胎児は人間だから軌跡をたどることは大切であると思います。胎児の間市場の可能性がまったくないとはいえません。冗談のようですが、そんなに突拍子な考えではありません。」

胎児の授受がどのような結果を導くでしょうか。それは、人間生命に対するさらなる冒瀆です。その一例をジェイムス・アラソン・オースティン氏の話で示しましょう。彼は、妻もガールフレンドもなく、ただ三万ドルの現金だけで父親になりました。警察の報告を引用したオーランド・センチネル紙によると、

「オースティン、銀行金融分析家は、二十九歳の女性に金を払い、自分の子どもを人工授精させた」。ラファイエット産業のフィリス・ハドルソンは十二月八日(一九九四年)に十ポンドの健康な男の子を出産し、その翌日オースティンに引き渡した。オースティンは、友達に子どもがいるのを見て、自分にも家族が欲しくなった。オースティンが警察にした供述によると、幼児の要求にただ圧倒されたということでした。彼は、「クリスマスの頃から子どもを何回か殴ったり揺すったりした」ことを認めました。顔を平手うちしたり、後頭部をプラスチックのハンガーで殴りました。その子がフィラデルフィア子ども病院に運び込まれた時には既に昏睡状態に陥っていました。頭蓋骨の骨折と、その他の頭部の怪我が見つかりました。その子は死にました。

上述したのは、未婚の人にも、

さも子どもを持つ権利があるかのように彼らを扱うことがいかに危険であるかを示している一つのケースです。子どもを持ちたいという欲望は、不妊症に冒された夫婦にとってはなんとしても達成したいことでしょう。しかし、結婚するということ自体に子どもを持つ「権利」があるのでしょうか？このことについて、法王ヨハネ・パウロ二世は次のように言っています：「残念なことには、生命をもうけるというデリケートな領域の中には、他にも気がかりな文化的兆候があります。しかも、その文化は他でもない真実の愛が引き起こしているものなのです。これは、新しい生命が除外されたり抑圧されたりした時は当然で、また逆に、どんな犠牲を払ってでも、また道徳的にどんなに許されぬ手段を使っても生命を欲しいと思った場合でも同じなのです。事実、人工授精や代理母を雇うことなど、人間を創る技術は加度的に広まっており、重大な倫理的な問題を呈示しています。その中でも我々が心に留めて置かなくてはならないのは、これら人工的な技術によって、人間は真実の愛の行為によって、また通常の生物学的法則に則って生まれてくる権利を剥奪され、

そのため生まれた時から法的、社会的な矛盾が心の中に存在し、

それに一生つきまとわれることになる、ということなのです。」(アンジェラス・メディテイション、一九九四年七月三十一日) バチカンの書簡「ドムム・ヴィテ(Domum Vitae: 生命の賜物)」の中から：「この子どもを持ちたいという願望は、不治と思われる不妊症に悩む夫婦にとってはさらに強いものとなる。しかしながら、結婚によって、子どもを得る権利が夫婦に与えられるわけではなく、ただ、本性上生殖に向けられる自然の行為を営む権利のみが与えられているのです。厳密かつ真の意味での子どもの権利というものを認めた場合、子どもの尊厳と本性を損なわれるであろう。子どもは、それに対して親が権利を持つ対象ではないし、所有の対象と見なされうるものでもない。むしろ、子どもは『最高のたまもの』であり、結婚によって与えられるたまもの中でもっとも尊いものであり、親が与え合ったことの生きたあかしである。ゆえに、前に見たように、子どもは両親の夫婦としての愛の営みの実りとして生まれる権利、また受胎の瞬間から人間として尊重される権利を持つのである。」(第8節)

今一度言います、「神であり、救い主、主イエスキリスト、あなたを誉めたたえます。あなたがこの地上に創られた教会を通じ、

あなたの英知を我々にお授け下さったことを感謝します。あなたなしては私達は迷い子となっていたでしょう。」

バチカン二世は「ルーメン・ジェンチウム(Lumen Gentium: 人々の光)」の中で、私達に教えてくれました：「人が神の教えを受け入れない時、人は自ら、人間の尊厳の意味が分かりにくくなる。」

ウィリアム・コリトン



ヨーロッパ諸国、クローンを禁止

今年の初め、ヨーロッパ諸国委員会を代表する19人の委員が、「その生存の有無を問わず、ある人間から遺伝学的に同一の人間を作り出すことに一切関わってはならない。」という法律によってヨーロッパの国々がクローン人間の製造を禁止する条約に署名をした。

フランスのジャック・シラク大統領は、「試験済みではないので危険だし、道徳的にも受け入れられない。人類の種に変化をもたらすかもしれないクローニングや遺伝子操作を禁止するのは国際社会の共通認識となっている。」と述べ、人間のクローン製造を試みようとしたシカゴ在住の科学者リチャード・シードを非難した。上記条約に署名したのは、デンマーク、エストニア、フィンランド、フランス、ギリシャ、アイスランド、イタリア、ラトビア、ルクセンブルグ、モルダビア、ノルウェー、ポルトガル、ルーマニア、サン・マリノ、スロベニア、スペイン、スウェーデン、マケドニアそしてトルコの国々である。ドイツは今回署名を見合わせた。

この法令が、ドイツですでに施行されている法律で人間の胎

児に関するいかなる研究の禁止して

いるものよりも効力が弱いと考えたためである。イギリスもサインを拒否した。人間のクローニングは早ければ来年にもイギリスで実験が開始されるだろう。インディペンデント・サンデー紙は、直にイギリス人間遺伝子諮問委員会から内容が公表されるだろうと報じた。それによると、「人間におけるクローニングに関する研究が十分な支持を得られれば、最初の実験は一九九九年から開始されることに政治家たちもゴー・サインを出すだろう。」とのことである。

神はいつでも許して下さい

THE GARDIAN

密かに受けた中絶手術の苦しみを心の底にしまいこんでいる人がたくさんいます。彼女らは、自らを恥じ、この苦しみは他人にはわからないと思ひ込み、沈黙しているのです。「自分はおかしいのだ。他の人は、中絶の後にこんなふうを感じることはないに違いない」と考えているのです。心に傷を負ったこのように人々の気持ちを私たちプロライ

フは理解していると彼女らに分かってもらうことが必要です。中絶後に苦悩することだけでなく、感情的・精神的な癒しを求め、こともごく当然で、むしろ必要なことなのだ彼女らに知ってもらおうのです。自分を恥じる気持ちから彼女らを救い、神の許しに導くことは、私たちの義務であり、中でも、彼女らが自分を受け入れられるように手助けすることが大切なのです。

そこには、プロライフ運動と教会が、中絶経験者に批判的であるというマスコミによって押し付けられたイメージを払拭することが必要不可欠です。私たちは、人の命の尊さと、私たち自身を含む全ての罪人に対する神の愛という二つの真実を守ることに徹するべきです。たとえば、「中絶は人を殺す。神は人を許す」というパンパステッカーを作成するなどの方法を取ってもいいかも知れません。

一部のプロライフグループには、神の許しを強調すると、中絶後に許しを求めさえすればそれでいいという考えを助長するのではないかと危ぶむ向きがあるようです。中絶を受けた人々の苦しみを癒す環境づくりには、彼女らへの理解と同情が何より必要なのです。そのような環境づくりを経てこそ、プロライフの

社会は生まれるのです。中絶が個人や家族、そして社会にもたらす苦悩をみんなが知って初めて、中絶が非合法であるばかりでなく、考えられることすらない社会が実現することでしょう。

1996年10月

ニューヨークでコンドームを使った授業をしないことが可決される

ニューヨーク市の教育委員会は先頃エイズに関する新しいカリキュラムを実施することを4対3で可決しました。これは、教室ではコンドームを実際に使って授業をするのをやめ、妊娠や性病を予防するのに最も効果的な方法として禁欲を強調するものです。それは今では普通となっている教室でコンドームを実際に使って説明する授業を教師に禁止しています。

教育委員会のメンバーであるジェリー・カマラータは、こう述べました。「私がこの案に投票したのは、他の大都市の公立学校でコンドームを奨励することによって起きている暗い現実に基づいてのことです。コンドームの使用を奨励することによって、生徒達の妊娠や性病が減っているという立証する証拠が何一つとしてないのです。」

REUTERS

スウェーデン

一九三四〜七四年にかけて、六万二千人ものスウェーデン人が優勢的理由で不妊手術を受けられた。思想的危険人物、精神薄弱、混血などがその対象となった。

ある女性は視力が悪く、学校で黒板の字が読めなかった。政府は彼女を知的障害とみなし、17歳の時に「あなたは知的レベルが低いので子どもを持つてはいけない」と不妊手術を受けさせた。現在72歳になる彼女は、スウェーデンにはびこりながら、最近までほとんどいって触れられずにいた強制的不妊手術を証言しようと立ち上がっている。ジャーナリス Machiej Zarembo も最近、スウェーデン、ノルウェー、デンマークで第一次大戦後始まった民族「工学」について記事を発表している。スウェーデン政府は被害者への損害賠償を求められることになるだろう。フランス政府も似たような反撃を受けるだろう。この20年間に、一万五千人ものフランス人女性が、肉体的もしくは精神的欠陥と判断され、本人の同意なしに不妊手術を受けさせられていたと見られる。

(97年8月25日ワシントンポスト)

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

「中絶に反対する運動」

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-31

電話/Fax 0888-73-3619 e-mail: nvt56n@ps.inforyoma.or.jp

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円
一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニューズレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

事務所時間:

月一金 12:00 - 17:00
日のみ 14:00 - 18:00
土曜日 休み

御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店
口座番号: 0573553
日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」
現在口座番号: 01660-5-39607
日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

いつのまにか暑い夏も過ぎようとしています。皆様いかがお過ごしでしょうか。

七月二十三日の高知新聞に次のような文章が記載されていました。

『成長したマウスの体細胞を使って、遺伝的に全く同じクローンマウスを誕生させるのに世界で初めて成功した。…体細胞クローンの哺乳動物は羊、牛と合わせ三種類となり、人を含めどんな動物でも遺伝的に同一な複製を作れる可能性があります高まった。』

『人を含め…』と言ふ言葉を見れば、社会人として、私達は皆危惧を抱いてしまつてしょう。この文章から判断して、最近だんだん、人間と品物を区別することが難しい社会に成つてきていると思ひます。私達人間は、品物を作つたり、売つたり、買つたり、捨てたりして生活しています。今、科学者達が行なおうとしていることは、将来、人間を作つたり、人間を売買したり、人間を捨てたりする社会ではないでしょうか。

人間の将来は人間や科学の決めではありません。クローン人間を作ること、人間の尊厳と創造を無視しています。だから、クローン人間は法律で禁止されなければなりません。

日本プロ・ライフ・ムーブメントは科学の研究で、野菜や動物のクローンを作ることについては反対ではありませんが、事、クローン人間に関しては強く反対します。

人間は尊厳あるものです。クローン人間を作ること、私達の未来を危険に満ちたものにするでしょう。人間のいのちの尊厳を科学に任せることが出来ない理由はここにあるのです。

クローンについての皆様のお考えを教え下さいませんか。もし、よろしければ、千五百字位の記事是非書いてくださいますようお願い致します。

夏の疲れが出てくる頃です。どつぞ、お体を御自愛下さいませよう。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

若者：舞台裏での中絶との闘い

潔の恩恵について語りかけています。

(今日、中絶反対の私達は絶えずマスコミの攻撃にさらされています。マスコミは私達が全員中絶医を射殺する過激派であると思つて居るようです。このような間違った固定観念に落胆することなく、マスコミのスポーツライイトの当たらないところで、この闘いに臨むのが私達のやり方です。)

祈りが私達の最も強力な武器です。そして祈ることはいつでも実行することができますし(またそつであるべきです)。中絶に関わつて居る人々の考え方を変え、彼らが真実がわかり、幼い子ども達を守ることができるよう、祈りをささげましょう。過去、現在、未来の殺される胎児とその母親のために祈りましょう。

また、中絶賛成を唱えるマスコミの目の届かないところにプロライフセンターがあります。ここでは中絶との闘いが非常に効果的に繰り広げられています。なぜなら、これらのセンターは母親と赤ちゃんに絶大な支援ができるからです。驚くべきことに、行なわれている全ての中絶の90%が、よく言われるような人種や近親相姦や母体への危険によるのではなく、自分の都合によるものです。

多くの女性はほとんど万策が尽き、頼るべきところがなくなつた時、危機的な妊娠の状態に陥ります。でも、プロライフセンターを訪ねれば、彼女達は友情と思いやりと援助を発見できるのです。避妊や中絶が支持されることは全くありません。多くのセンターでは、学生達に貞

素晴らしいことは、あなたも人の助けになれるということです。プロライフセンターに電話してみ下さい。中絶と闘う簡単で効果的な方法があるのです。多くの胎児の命があなたにかかっています。恐らく、神様の恩寵によって、マスコミがいつの自覚を覚醒を見る日が訪れるでしょう!

カトリックの人々が

できること

宗教は、自殺に対する態度を決めるのに大きな役割を果たしてきた。そしてそれは同じように、今日わが国で国民の議論を巻き起こしている安楽死と医師による自殺補助についても重要な役割を担っている。

私たちは人間としての個人の尊厳と安楽死や自殺補助の蔓延を阻止する政策を生み出す社会の責任に焦点を当てて行かなくてはならない。

医者や他のヘルス・ケアの専門家たちに、患者の死へのプロセスを長引かせるのではなく、適切な処置と思ひやりをもつて病気を治療し、命を持続させる役割と責任を持ってもらうように呼びかけていくべきである。

人間の命の価値と威厳はすべての人にとつての関心事であり、今日、私たちが議論すれば、このことを公式に認め、社会的保護を築いていくようになると思つのである。

プロ・ライフ